

開いた世界と閉じた世界に着目した大学生のソーシャルメディアの捉え方

西 春菜

ソーシャルメディア、特に LINE、Twitter、Instagram はその登場以降利用率が年々伸び、特に若者の利用率は高い。Twitter や Instagram は登場初期、誰とでも繋がることができる、自分の好きなことを自由に発信したり、見知らぬ人の発信を自由に見ることができると捉えられていた。一方で、普及が進むにつれ、それらはよりクローズドなものとして捉えられるようになった。リアルな知り合いに限定してやり取りをする、投稿を見られる人を限定するといった、何らかの制約をユーザー自身が設け、他から見えないところで、よりパーソナルなものとして使われていると考えられる。これらの登場初期イメージを「開いた世界（開いている）」、誰もが見ることができるのではなく、他から見えない空間を「閉じた世界（閉じている）」と定義した。しかし、「開いている」「閉じている」のどちらかに分類できない「開いた世界であるはずなのに、意識としては閉じている」すなわち「開いているが閉じた」使い方が存在し、かつ、それが若者の一般的な使い方のように思われる。この概念を用いて、ソーシャルメディアというひとつのプラットフォームのなかで、「開いた世界」と「閉じた世界」がどのように複合的に存在しているのか、若者が両者の意識を併せ持った状態でソーシャルメディアを利用している様子を描き出すことを目的とする。

Twitter、Instagram のどちらか、もしくは両方のアカウントを1つ以上持っている筑波大学の学群生 30 名を対象とした半構造化インタビューを行った。持っているアカウントそれぞれでの使い方や経験、使う際の意識を語ってもらい、その使い方が「開いている」「閉じている」「開いているが閉じた」意識とどう結びついているかを分析した。

調査の結果、多くの学生が、言葉遣いに気を付ける、パーソナルなやり取りは DM や LINE に移行するといった「開いた世界」「閉じた世界」を使い分けていることが分かった。なお、オープンアカウントと鍵垢を両方持っている人は、鍵垢がいわゆるメイン垢で、初めから特定少数との「閉じた世界」をつくってやり取りする使い方も見られた。つまり、登場初期のような「開いた世界」での使い方は盛んではなく、開いた世界での使い方「も」しているのが現状であった。そのため、現在の若者の一般的な使い方と考えていた「開いているが閉じた」意識はほとんど見られなかった。しかし、「開いている」意識を持っている学生の中にも、ある特定の投稿内容・やり取りに関してのみで「分からない人はスルーしてくれるだろう」「このあたりの人からしかリアクションは来ないだろう」といった、限定的に「開いているが閉じた」意識になる場合が多く見られた。これは、フォロー・フォロワー関係が知り合いのみ・普段はフォロワーの中の特定の人としかやり取りしないためであると推測される。現段階で問題に発展した経験は見られないため、この意識が間違っていると断定することはできないが、この意識の延長に炎上を生むような事例が存在しているのではないかと推測される。

(指導教員 松林麻実子)